

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

こころの仕組みがどんどん明らかになります。

島生み その一 1

その 345

古事記本文

「ここに天津神<sup>あまのかみ</sup>諸々<sup>もろもろ</sup>の命<sup>みこと</sup>以ちて伊耶那岐の命・伊邪那美の命の二柱の神に 詔<sup>の</sup>りたまひて この漂<sup>たぐよ</sup>える国  
を修理<sup>おさめ</sup>め固め成せと、天の沼矛<sup>ぬのぼこ</sup>を賜ひて、言<sup>こと</sup>依<sup>よ</sup>さしたまひき。かれ二柱の神、天の浮橋に立たして、  
その沼矛<sup>ぬのぼこ</sup>を指し下ろして描<sup>な</sup>きたまひき、塩<sup>しほ</sup>こをろこをろに描き鳴らして、引き上げたまひし時に、その矛の末<sup>すき</sup>  
より滴<sup>したた</sup>る塩の積りてなれる島は、淤能碁呂島<sup>おののころじま</sup>なり、その島に天降りまして、天の御柱を見立て<sup>やひろどの</sup>  
を見立てたまひき。」

心の先天構造を構成している 十七個の言霊が出揃って、その十六、七番目にあたる伊耶那岐・伊  
耶那美の二神、言霊 イ・杵が「いざ」と立ち上がり、いよいよ二神の子供である三十二の子音を生むこ

とになります。「島生み」と名付けられましたこの章は、実際に岐・美二神が子である子音を産む前にどんな事が行われたか、と言ういわば子を産む前の前奏曲とでも名付けたい章であります。文章の一節一節をおって説明して行きましょう。

「ここに天津神諸々の命依ちて」

天津神とは先天の十七神のことです。けれどこの文章を文字通りに「先天の十七神の命令によって」と解釈したのでは言霊の意味が出てきません。古事記神代の巻が言霊原理の教科書であることを念頭において考える必要があります。古事記の神々の名前が言霊を表す指月の指であることの見地に立ちますと、神様の物語がすぐ生きた人間の心の活動の話として了解できるようになります。「神様の命令で」ということは「人間の心の先天構造である十七の言霊が活動を開始して」という人間の心の働きの話になります。

「伊耶那岐の命・伊耶那美の命の二柱の神に詔りたまひて、」

「詔りたまひて」を命令して、と解釈せず、先天十七の言霊が動き出し、その十六、七番目の言霊イ・牟の創造意志が「いざ」と立ち上がって、と生きた人間の行為として考えますと 意味が 道理を 明瞭になります。ここに伊耶那岐・美の神ではなく伊耶那岐・美の命という言葉が出てきました。伊耶那岐の神といえ、原理法則であり、原理法則としての存在という意味であり、命といえ、原理法則を表現した言葉またはその実行者である人間を示すことと成ります。

注一、古事記の神（かみ）と命（みこと）との関係はの仏教の仏（ほとけ）と菩薩（ぼさつ）とのそれに似ている。修行により自己の本性が空（宇宙）であることを知り、更に発心して 全人格の完成である仏に向かって 精進する人を因位の菩薩と言う。仏道を完成したのちこの世の底にあって苦悩に沈む人々を救う為にこの世の中に身を現じ、人間として理想世界（仏国土）の

建設に励むものを果位の菩薩と言う。神と命、仏と果位の菩薩は同じ関係である。

その 346 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生み その一 2

その 346

「この漂える国を修理め固め成せと」

先天の構造要素はで全部出揃ったけれど、それは目に見えない先天のことで、現象としてはまだ何も生ま

れてこない 渾沌（漂える）状態にあります。この状態を日本書紀には「滄海」「天霧」などと記し、また

「我が生める国、ただ朝霧のみありて、薫り満ちてるかも」と述べられています。現象が生まれてくる以前

の状態の美しい表現です。

修理め成せ、というのは、人間に与えられている天与の性能を働かせて、宇宙の中で人間に関係する一切のものを創造し、確認して、それぞれに名をつけ、人間の生活にふさわしい文明社会を建設して行くこと  
とあります。それは渾沌として何だかわからない現象の世界の物や事を、人間の天与の能力によって  
確認し、応用し、その内容に応じて適当な名前を付け、その事物の意義を決定して行くことだということが  
出来るでしょう。

なんだか難しい表現になったようです。物事や社会を創造する、といいますと、すぐに工場で物を生産したり、農業で米や野菜を作り、また道路がダム、そして近代的な社会を作っていくことである、と思います。もちろんそれに違いはないのですが、それは物質という立場、客体という立場から見た言い方です。心の

側、主体の側から見て表現したらどうなるでしょうか。

以前に「無名は天地のはじめ、有名は万物の母」という老子の言葉を 取り上げたことがあります。そこに物があっても、見る人がいなければ何も始まりません。名前がないこと、それが物事が始まる以前、全てのものの始まりです。人が居て、ものを確認し、それに名前を付けること、それがものがあるということになります。名前がなければ、それがなんであるかが分からず、渾沌と言う意味です。

「修理め固め成せ」<sup>おさかた</sup>というのは先天の十七この言霊を働かせて、子音である現象の要素を生み、その子音を結合させることによって一切の現象に名前を付け、その名前自体が指し示す道理を実現するような人間社会を創造して行く、ということなのです。 言葉が一切のものの母であり、人間社会の実体は言葉であり、言葉が次々に発展して行くことが文明の発展ということになります。人間の社会において「創造する」ということを 心の側から 見ると以上のように言うことができます。

その 347 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生み その一 3

その 347

「天の沼矛ぬのぼこを賜いて、言依ことよさしたまひき。」

矛とは古代の武器で、諸刃の太刀に長い柄がついたもの、と辞書にあります。古代の神々の物語として

はそのままの説明で済みますが、言霊の教科書としては何を意味するのでしょうか。それが言葉に関係する

ものになりますと人間の言葉を発する器官すなわち舌のこととなりましょう。

舌は矛の形をしています。舌を動かして言葉を発します。けれど舌だけでは言葉に出ません。舌を動かすのは心です。心である霊に言葉という音（言）を合わせて言霊（ことたま）とする器官が舌です。この舌で宇宙の实在を表すと 縦にアオウエイの五母音となり、現象を生む人間の創造知性の律を表すと横にチイキシリヒニの八父韻が現れます。沼矛の沼は貫（横）の意味であり、矛は霊凝（ほこ）のであります。父韻チイキシリヒニを発音してみてください。特に舌の絶妙な働きを必要することがわかるでしょう。

「天の浮橋に立たして」

吾と汝、私と貴方、主体と客体は母音と半母音で示されます。その主と客はただそれだけでは独り神で何の現象も生むことはありません。その黙っている实在と实在との間を取り持ちそこに現象を生んでいくキッカケとなるのがチイキシリヒニの八つの父韻です。この主と客の間に架ける橋、これを 天の浮橋といいます。



天は先天の意、浮橋とは先天の宇宙の中で主体と客体を渡す橋ということです。「天の浮橋に立たして」を人間の心の働きとして表現しますと、「伊耶那岐・美の二神である 言霊イ・杵の創造意志が、その実際の働きである八つの父韻となって活動して」ということになります。心の先天構造が活動を開始してよいよ後天の実相の言葉を生み出す瞬間です。「立たして」というのは伊耶那岐・美の二神が天の浮橋である八父韻の両側に立って向き合うことであります。

その 348 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生み その一 4

その 348

「その沼矛を指し下ろして画きたまひき」

「画きたまひ」は攪<sup>か</sup>きの謎、かき廻すことでもあります。人間が舌を使って音を色々に出してやることです。

八つの父韻の作用で 種々の現象（言葉）が現れ出てきます。

注一、古事記のほかの訳本には「画き」を「攪き」と書いているあるものも見受けられる。かき廻すの意味である。

「塩を ころこをろに画き鳴らして、」

塩（シホ）は四<sup>し</sup>穂<sup>ほ</sup>の意で、四つの母音言霊をさします。アオウエイの四音です。「しほ」は他に機（しほ）の意味もあり、物事の変化のキッカケを言い、それは八つの父韻のことでもあります。「汝は地の塩なり」という新約聖書マタイ伝の言葉はこの意味です。けれど今は「塩」は四母音のことでありましょう。

八父韻を以て四つの母音アオウエを舌を使ってかき廻して音を出してやることを言います。父韻と母音の結合で子音が生まれます。例えば  $k+a=ka$ 、 $t+u=tu$  等でカ・ツ等の子音が出てきます。その子音の数は  $8 \times 4 = 32$  即ち三十二個の子音が生まれます。

「引き上げ賜ひし時に、その矛の末<sup>さき</sup>より滴<sup>した</sup>る塩の積りて成れる島は」

舌を使って八つの父韻で四つの母音をかき廻し、引き上げて、さてどんなことが起こるか。舌の先から音が出てきます。島とは宇宙の「締まり」の意。一個の言霊は広い宇宙のある一部分を占有（しめ）その内容を分担しています。島とは広い海の一部を占め、その特徴を表しています。父韻の S は母音 A をかき廻せば サ という心の締まりとなります。「サ」とゆう一音は宇宙の中の「サ」と名付けるべき全ての物事を締めくくって表現します。このように締めくくられた宇宙の部分、部分を島といいます。

注一、 現代社会ではこの世に存在する物事を限定して分類・締めくくる基準として哲学的・論理的な概念を用いる。古代日本語の如く、概念を一切使わず直接の単音を以てそのものの実相ズバリを表現する方法は他に見ることが出来ない。言霊布斗麻邇の特筆すべき能力である。

その 349 につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

島生み その一 5

その 349

「おの能の暮る呂しま島」

おの己れの心の締め、と言う意。舌を使い父韻で母音をかきくって見ると音が出ました。その音の一つ一つ

が人の心の部分部分をそれぞれ締めくくって表現している、ということがわかってきたと言う意味です。このことを日本書紀には次のように美しく表現しています。

二神（伊耶那岐・美） 天霧の中に立たして曰く、吾れ国を得んとのたまひて、すなわち天の沼矛を以て指し垂<sup>くだ</sup>して探りしかは<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>能<sup>ご</sup>碁<sup>ろ</sup>呂<sup>しま</sup>島を得たまひき。すなわち矛を抜きあげて喜びて曰く、「善きかな国のありけること」これが人類が始めて言葉でもって自分の見・聞き・触れた事を表現することができた喜びである、と云うことが出来ましよう。言葉という人間の芸術の始まりです

「その島に天降りまして、天の御柱を見立て八尋殿を見立てたまひき」

天の御柱とは主体であるアオウエイ確立の姿を言います。これに対して客体であるワヲウエヅを国の御柱と

呼びます。この柱は主客合一の絶対の实在として心の中心に一本 となって立っている場合と、相対的

に主と客として二本立つ場合とがあります。この絶対と相対との立場については言霊の章で詳説しました。

宇宙の中の一切のものはこの柱より現れ出て、またこの柱に帰っていく宇宙の根本实在であります。

八尋殿は文字どおり八つを訪ねる神殿という意味です。神殿とはこの場合心の中に画かれる図形と言ったらよいでしょう。図で示しますと A 図または B 図の如くなります。この八つの間にチイキシリヒニの八父韻が入ります。この図形は基本となる八数の原理をどこまでも 保って二乗三乗……と次元的に限りなく発展して行きますので「<sup>やひろどの</sup>弥広殿」とも書きます C 図

そこで文章の意味する所をまとめますと次のようになります。人間が舌を使って八父韻を活動させ、四つ母音の宇宙をかきまわすと音が生まれました。その音の 1 つ一つが自らの心の部分、部分を表現していることが 確かめられました。そこでその自らの心を表すそれぞれの音の立場に立ってみますと、自分の心の中心にアオウエイ・ワヲウエヱの柱が建っており、その柱を中心に八つの父韻が入る間が展開していることが分かってきました。

注一、 天の御柱のことを日本神道は「一心の霊台、諸神変通の本基」と神道五部書で言う。伊勢神宮ではこの天の御柱を長さ五尺の白木の柱で象り、本殿中央の床下に安置している。心柱または忌み柱と呼ぶ。また易教に河図・洛書と言われるものがあるが、河図と洛書は天の御柱を数の図形で、洛書とは八尋殿を 数学の魔法陣の形で表したものである。



その 350 につづく